

寛政の三奇人

寛政年間

天明の後、享和の前。一七八九年から一八〇〇年までの期間を指す。この時代の天皇は百十九代光格天皇。将軍は十一代徳川家斉であった。

この時代は、田沼時代の後を受けた松平定信の寛政の改革で有名である。政治財政改革の他に、寛政異学の禁で朱子学を正統として蘭学の取り締まりを行い、処士横断の禁で林子平らの世論煽動を禁止した。本稿では寛政の三奇人の登場の背景とその人物像について触れたい。尚、奇人とは性格や行動が一般の人とは異なっている人のことである。変わり者ではあるが変人ではない。

寛政異学の禁

寛政二年（一七九〇）、老中松平定信が寛政の改革で行った学問の統制である。田沼意次時代の天明の大飢饉を乗り越え、低下した幕府の指導力を取り戻すために、儒学の中で農業と上下の秩序を重視した朱子学を正学とし、当時流行していた、蘭学や古文辞学や古学を「風俗を乱すもの」として禁じた。幕府の学問所である昌平坂学問所の講義や、役人登用試験も朱子学だけで行わせた。諸藩の藩校でもこれにならうものも出、朱子学に反対する学問を唱えていた儒者は生徒が少なくなり困窮した者もあったという。

なお、異学の禁に反対した儒者五名（亀田鵬斎、山本北山、冢田大峯、豊島豊洲、市川鶴鳴）を特に寛政の五鬼という。

昌平坂学問所では異学の講義を禁じられたが、国内の異学派による学問や講義を禁じられたわけではない。

余談であるが、三で呼ばれた人に次のようなものがある。

寛政の三博士とは、江戸時代の寛政期に昌平黌の教官を務めた朱子学者三人の事である。「寛政の三助」とも言う。古賀弥助（精里）・尾藤良佐（二洲）・柴野彦輔（栗山）の三人を指す。古賀精里の代わりに岡田寒泉を加えることもある。

寛政の三忠臣とは、江戸時代の寛政期に幕府内で活躍した老中らの事である。松平定信・本多忠籌（ただかず）（蝦夷地を幕府直轄地とし、開拓を進めてロシアの南下政策に対抗すべしと主張した。この主張は蝦夷地を荒野のままにとどめ、旧来どおり松前藩に統治させるべしとする定信に容れられず、彼の在任中には実現しなかった）・加納久周（ひさのり）（松平定信の寛政の改革推進に貢献した）を指す。

処士横断の禁

幕府に対する政治批判を禁止し、蘭学を公的機関から徹底廃止し、蘭学者を公職から追放した。海防学者の林子平などが処罰された。さらに贅沢品を取り締まる儉約の徹底、公衆浴場での混浴禁止など風紀の粛清、出版統制により洒落本作者の山東京伝、版元の蔦屋重三郎などが処罰された。

寛政の三奇人略伝

林子平 元文三年（一七三八）～寛政五年（一七九三）

親もなし 妻なし子なし 版木なし 金もなければ 死にたくもなし

江戸中期の経世家で、高山彦九郎・蒲生君平と並んで寛政の三奇人と言われ、「海国兵談」を著した海防論の先駆者林子平の歌である。号の六無斎は掲記の歌より来る。

林子平は幕臣の家に生まれたが、浪人となり、兄が仙台藩に仕えたのを機に仙台に住む。海外事情に強い興味を持ち、工藤平助や大槻玄沢等の蘭学者と交わり、海外事情の研究を進め、長崎や蝦夷にも数次に亘り遊学や探検をした。工藤平助は江戸時代中期の仙台藩の藩医で経世論家。若き日の林子平に影響を与えた人物。球卿と号する。前野良沢と親交があった。良沢の弟子である大槻玄沢が学業半ばで国元に帰らなければなくなった時、工藤平助の口利きによって再び江戸へ出ることができたという。

鎖国化の日本において、入ってくる帝政ロシアの情報をまとめ『赤蝦夷風説考』を著した。（赤蝦夷とは当時日本側が使っていたロシアの通称）ロシアの南下を警告し、開港交易と蝦夷地経営を説いた。

また、林子平の『海国兵談』の序文を書く。その結果、海防の急務を感じた子平は「海国兵談」で四面海に囲まれた我が国の特殊性に鑑み、国防特に海防の重要性に論及する。外寇を防ぐのは水戦であり、水戦の要は大銃（大砲）であると指摘している。軍艦と大砲の整備が急務であり、陸戦はその後であると主張しているのである。海軍の必要性・重要性を説いた内容の堂々十六巻に及ぶもので、彼の心血を注いだ力作で自信作でもあった。

幕末になって、徳川斉昭や佐久間象山等が、海防の重要性を説くが、寛政の時代に子平が唱えたことは実に先見と言わざるを得ないと思う。また、「三国通覧図説」では蝦夷開拓の重要性を指摘している。

しかし乍ら、彼の著作は幕府の「異学の禁」なる言論統制にひっかかり、世人を惑わし政治を私議したとして発刊禁止となり版木も没収され、子平も兄の家に蟄居を命ぜられると言う極めて厳しい処分が下された。「異学の禁」とは、江戸時代中期、老中松平定信が寛政の改革で行った学問の統制。寛政二年（一七九〇）、定信は儒学のうち朱子学を正学、他を異学とし、幕府の学問所である昌平坂学問所では朱子学以外の講義を禁止し、役人登用試験も朱子学だけにした。官学である朱子学を盛んにしようとしたものであり、諸藩の藩校でもこれに倣うものも出た。昌平坂学問所では朱子学以外の講義を禁止したということであり、朱子学以外の学派を禁止したわけではない。「処士横断の禁」もあった。処士とは仕官してない在野の士人を指す。在野の士が勝手に政治に関する活動をするなどということであり、言論・活動の統制であった。

悲憤絶望した彼が半ば自嘲気味に作ったのが、掲記の歌である。子平は時代の先を走り過ぎたため、当時の人々の理解を得ることが出来無かったが、彼の鳴らした警鐘はペリーの来航で正しかったことが証明された。また、「海国兵談」上梓後百年余りにして漸くその実を結んだのである。即ち、明治五年の海軍省の設置であり、それに続く黄海海戦や日本海海戦での勝利である。この歌を作ったのが五十五歳でその一年の寛政五年（一七九三）六月二十一日に失意の内にその恵まれぬ生涯を閉じた。

享年五十六歳。

高山彦九郎 延享四年（一七四七）～寛政五年（一七九三）

薩摩人 いかによいかに 刈萱（かるかや）の 関もとごさぬ 御代としらずや

林子平・蒲生君平と並んで寛政の三奇人と呼ばれた勤王家として名高い高山彦九郎正之の歌である。本名は正之、彦九郎は通称である。

掲記の歌は彼が肥後から薩摩に入る時、薩摩の野間の関所で関所役人に咎められた時の歌である。世に古来より厳しいことで名高い刈萱の関（大宰府の守りとして造られた関所）でさえ今は、閉ざさずの交通の自由がある治世の御代であると言うのに、こんな薩摩の片田舎の関所が人の往来を差し止めるとは何事であるかとの意で、反骨で意気軒昂な彼の気分が実に良く表れていると思う。問答の末に彦九郎は野間の関を越えて鹿児島へ入ることが出来たと言う。

上野国新田郡細谷村（群馬県太田市）の生まれ。勤皇の志を持ち、各地を遊歴して勤皇論を説く。前野良沢・大槻玄沢・林子平・藤田幽谷・上杉鷹山・広瀬淡窓・蒲池（かまち）崑山（こんざん）など多くの人々と交友し、蝦夷地へ渡ろうとするが果たせずにはいた。京では岩倉具選（ともかず）（岩倉具視の数代前の岩倉家当主）宅に寄留し、光格天皇にも拝謁した。尊号一件（事件）と呼ばれる事件に遭遇し、公家中山愛親（なるちか）の知遇を得た事が老中の松平定信など幕府の警戒を招くことになる。寛政三年（一七九一）には九州各地を旅した後に薩摩藩を頼ろうとするが退けられ、一時は豊後国日田において捕縛される。その後も幕府の厳しい監視と追及を受け、筑後国久留米の友人森嘉膳宅で自刃に追い込まれた。享年四十六歳。

尊号一件とは、日本の江戸時代後期に起きた京都の朝廷と江戸の幕府との間に発生した紛議事件である。尊号事件ともいう。

第一百九代光格天皇は閑院宮典仁（すけひと）親王の子であったが、後桃園天皇が崩御した時に皇子がいなかったためにその養子となって即位したので、父よりも位が上になってしまった。しかも禁中並公家諸法度における親王の序列が摂関家よりも下であり、天皇の父が臣下である摂関家を目上としなければならぬ事に対しても天皇は不満を抱いた。だが、禁中並公家諸法度は江戸幕府にとっては初代徳川家康が定めた祖法であり、その改正は幕府そのものの尊厳を傷つけるものとして拒絶してくる事は目に見えて明らかであった。そこで光格天皇は実父である典仁親王に対して太上（だいじょう）天皇（上皇）の尊号を送ろうとした。

天明八年（一七八八）に天皇の信頼が厚い公家の中山愛親らが幕府に通達すると、老中松平定信は皇位に就いたことのない人間に皇号を贈るのは先例の無い事態として反対する。朝廷では徳川時代以前の古例を持ち出し、朱子学を正当とする定信と対抗し、朝幕間の学問的論争に発展する。寛政三年（一七九一）十二月、天皇は「群議」を開き、参議以上四十名の公卿のうち三十五名の賛意を得て尊号宣下の強行を決定する。

この事態を憂慮したのは前関白で典仁親王の実弟（天皇からみて叔父）でもある鷹司（たかつかさ）輔平（すけひら）であった。輔平はこのままでは朝廷と幕府の全面対決を招いて兄・典仁親王の身にも危険が及ぶと考えて、定信に事の次第を告げて尊号を断念する代わりに典仁親王の待遇改善を

求めた。しかし、定信は中山愛親・正親町公明らの公家に処分を下し、また九州で活動していた勤皇家の高山彦九郎を処罰した。

勤皇派の水戸徳川家が定信に賛成すると、輔平と後桜町上皇の説得を受けて天皇も渋々尊号一件から手を引いた。定信も典仁親王に千石の加増をする等の待遇改善策を行うことで尊号の代償とした。

同時期に幕府内では十一代将軍徳川家斉が実父の一橋治済(はるさだ)に対して「大御所」の尊号を贈ろうとしていた。定信は朝廷に対して尊号を拒否している手前、将軍に対しても同様に拒否をせざるをえなくなり、結果、家斉の機嫌を損ね、事件後に松平定信が失脚、辞職する遠因となる。

だが、碩学の定信が「皇位に就いていない人間に皇号を贈る先例」の存在を本当に知らなかった訳ではない(事実、定信も「後高倉院(高倉天皇の第二皇子。子の後堀河天皇が即位すると太上天皇の号を奉られた)や後崇光院(伏見宮栄仁親王の子。子の後花園天皇が即位すると、後高倉院の例に倣い太上天皇の尊号を送られた)は承久の乱や正平の一統(南北朝の戦い)という非常事態が生んだ産物で太平の世に挙げる先例ではない」と反論している)。

定信は寛政の改革によって幕藩体制の再建を進めていく中で、その思想的根幹である朱子学を保護して「寛政異学の禁」や「処士横断の禁」を打ち出していた。朱子学は儒教の中でも大義名分や主君への「忠」、「君臣の別」を重んじる学派であり、特に日本では本来儒教が徳目として最も重んじていた「孝」以上に重要視された。この問題は言うなれば「忠」と「孝」の衝突であり、陽明学や古学、尊王論などの反朱子学的な(反幕藩体制につながりかねない)動きを抑圧するために強硬策を採った事も考えられるのである。また、田沼意次と一旦は手を組みながら後にこれを失脚させた一橋治済の政治的野心(大御所政治)への不安があったとも言われている。

なお、典仁親王は明治十七年に明治天皇の直接の先祖にあたる(明治天皇は典仁親王の玄孫)ということで、慶光天皇(慶光院とも)の諡号と太上天皇の称号が贈られている。

彦九郎は多年に亘る日記を残しており、吉田松陰はじめ、幕末の志士と呼ばれる人々に多くの影響を与えた人物である。また、二宮尊徳や楠木正成と並んで戦前の修身教育で取り上げられた人物でもある。

彦九郎は上州新田郡細谷村の郷士高山良左衛門正教の次男として生を享けたが、十三歳の時に「太平記」を読み先祖が南朝の忠臣新田義貞の親兵で豪勇を謳われた十六騎党の高山遠江守であったことを知り、感激発憤し勤王思想に目覚めたと言う。十八歳の時に故郷に遺書を認めて京へ上り、三條大橋で平伏し御所を拝み涙した話は有名で、「人は武士、気概は高山彦九郎、京の三條の橋の上、遙か皇居を伏し拝み、落とす涙は賀茂の水」と後に俗謡にも歌われたが、彼の真摯な朝廷崇拜の念が表れているのである。

彦九郎は「草莽の臣高山正之」と大声で連呼し行く人をして驚かしめ、さらに等持院に至り、先祖の仇敵であり南朝に敵対した賊臣・足利氏累代の墓碑を鞭打ったと伝わる。その後、当時京を中心に支持されていた尊王思想の強い山崎流の神道を学び勤王の志いよいよ高まり、以後は南朝の史跡を訪ねて各地を歴訪し勤王思想の普及に努めた。その間、公家や学者との交流が深まり、勤王家としての令名を謳われるようになる。

寛政三年には琵琶湖で取れた緑毛の生えた亀(古来中国では亀に毛があるものは文治の瑞兆と言われていた)を親しき公家を介して叡覧に呈するに至り、時の光格天皇に拝謁の栄を賜わった。名も無き草莽の身であり乍ら、竜顔を拝する栄誉に彼は感奮して「われをわれと しろしめすかや すべら

ぎの 玉のみ声のかかるうれしさ」の歌を残しており、これが『愛国百人一首』に採録されている。勤皇家彦九郎一代の感激であったと言う。京都は「尊号事件」を有利に展開させるため、西国大名を味方に付けるべく高山彦九郎に九州各地で緑毛亀運動を繰り広げるよう命令したという。

彼の思想は勤王の念が厚いと言うことで、後年の幕末に見られる討幕的な発想は全く無かったにも拘わらず、次第に幕府の嫌疑や圧迫を被るようになり、遂に久留米で自決の止む無きに至った。寛政五年（一七九三）六月二十七日で林子平に遅れること六日であった。

彼の思想や行動が幕末に輩出する草莽の志士の先駆をなしたことは否めない。特に久留米出身の真木和泉や平野國臣は大いに影響を受けたとされるのである。

太平記を読み先祖が新田義貞の家来であったことを知り、それが契機で勤王家となり、純粋無垢に朝廷尊崇一筋の生涯を送った彼の人生は当時の人々にはやはり奇人と写ったのであろうか。

蒲生君平 明和五年（一七六八）～文化十年（一八一三）

諱は秀實（ひでぎね）、通称は伊三郎、号は修静、字は君平、君蔵。

比叡の山 見下ろすかたぞ 哀れなる 今日九重の 敷し足らねば

高山彦九郎・林子平と共に寛政の三奇人（三奇士）と言われた尊王思想家である蒲生君平の歌である。当時の皇室は式微の極みで皇居も荒廃しておりその昔の栄耀栄華を極めた平安時代の面影は残されていなかった。高山彦九郎の歌に「東山 のぼりてみれば あはれなり 掌のひらほどの 大宮所」の歌が残されているが如しである。

掲記の歌は『山稜志』を著すために君平が入京していた頃の作と思われる。君平は下野宇都宮の灯油商の福田家の次男に生まれ名は秀實で君平は字で修静庵と号す。

祖母より先祖が蒲生氏郷の庶族の流れと聞き感激し長じて蒲生姓に改名する。最初は同国鹿沼の鈴木石橋（二十四歳の時、江戸に出て最高学府の昌平黌で学を納め鹿沼に帰り塾を開いた）の塾に十五歳の君平も通うことになる。鈴木石橋は弟子の君平たちに視野を広くし為政の眼を開かせるため親交が深かった鈴木為蝶軒の許を訪れさせた。

為蝶軒は黒羽藩大関家の家老であり、農政に明るく、領内に郷倉を設けて、毎年収穫期に一定の穀類を貯蔵させたため、天明の大飢饉に、奥州関東にかけて餓死する者が二十五万人と伝えられた時、黒羽藩はこの郷倉により領内に一人の餓死者も出さなかったことから、一躍、全藩の信頼を集めその名は他国まで知られるようになった人物であった。君平は三十五歳年長の為蝶軒を師父のような気持ちで、その高風に接し、国の制法沿革あるいは政治の情勢、往来する人物評等を聞き、その教化されることは大なるものがあつた。

寛政二年（一七九〇）高山彦九郎に私淑し彼の後を追い陸奥へ行き石巻で彦九郎と面談し帰路に仙台で林子平に面談したと伝えられるが、真偽の程は明らかではない。三奇人が一同に会したとする世人の創作話であろう。

寛政四年「今書」を著し時弊を論じ、寛政八年には歴代天皇陵の荒廃を嘆き調査のため京へ上る。その途次に伊勢松坂に本居宣長を訪ね大いに時勢を論じたとされるから宣長よりも大いに影響を受けたものと思われる。

寛政十二年に再度京へ上り畿内諸国の山稜を踏査し帰途に再び本居宣長を訪ねた。寛政十三年（

一八〇一)に『山稜志』を書き上げて宣長に意見・批評を求めた。『山稜志』は彼の代表的な著書となり後の山稜復興運動や尊王論の先駆的役割を果たしたと言われている。前方後円墳の名前は君平が付けたものである。

享和二年(一八〇二)、江戸へ上り江戸へ出て山本北山門下となり昌平黌にて儒学を学ぶ。その後、水戸と往来して立原翠軒や藤田幽谷と交わり更に研鑽に励む。特に幽谷とは終生に亘る親交を結んだ。

文化元年(一八〇四)には吉祥寺の近くに学塾「静修庵」を開いた。その後も文筆活動に多くの時間を費やし、著書に『不恤緯(ふじゅつゐ)』、『山稜志』、『職官志』、論策に『今書』がある。

著書『不恤緯(ふじゅつゐ)』では、当時懸念されていたロシアの北侵に対する国防を建白、懦弱なる士族を頼らず、むしろ剛健なる民兵を用いるのが得策であると論じた。これは、後に奇兵隊などで実証されているし、稔磨が懸案した屠勇取り立てにも少なからず影響を与えたのではないだろうか。彼の思想の根幹をなすものは朱子学であり特に名分論に重点を置いたものでその尊王論も皇室崇拜の敬慕に発するもので幕末の討幕思想とは無縁のものではあったが『山稜志』は幕末の尊王論に多大の影響を与えたとされている。

君平の思想に危険なものはなかったとされているが、晩年に出回った怪文書『幕罪略』は、君平の朋友であった滝沢馬琴などは君平の作であろうと推定している。『幕罪略』というのは、「狭小なる禁中に、天皇を禁錮し奉り、二百年行幸も之れ無き事」など二十箇条の幕罪を数え立てた文書である。そして、最後にこう署名してあるという。

文化五年 京師東山寓居に於て憤記す

下野国 草莽無名氏

『明治維新の源流』の著者、安藤英男氏は、その著書の中で『幕罪略』に盛られた大胆な所論は、あきらかに討幕の思想に根ざしたものである。すなわち、このような思想が世間に発生したということ自体、かつて無い重要なことといわざるをえない。君平の行実には、いささかも倒幕の意味はなかったが、結果としては、討幕思想を刺激したこと、些少ではなかったであろうと述べている。

痛烈な幕府批判、草莽という言葉。蒲生君平は、いかにも吉田松陰が好みそうな人物ではなかろうか。おそらく、松陰は「幕罪略」を読んで、大いに感銘を受けたに違いない。そして、その君平の諱であった秀實を愛弟子の吉田栄太郎(稔磨)(松陰四天王の一人)に与えたことは、松陰が栄太郎に何を期待したかを知ることにも繋がる。『明治維新の哲学』の著者、市井三郎氏は松陰が倒幕論者であったことを検証されているが、蒲生君平の『幕罪略』と、栄太郎に与えた秀實の諱は、それを改めて納得させる根拠にもなり得るとも推察されるのである。

最後に、君平が詠んだ漢詩を紹介する。

述懐

丈夫生有四方志 千里劍書何処尋 身任転蓬無遠近 思随流水幾浮沈
笑対樽酒興先発 泣読離騒酔後吟 唯頼太平恩沢渥 自将章句托青衿
丈夫生まれて四方の志あり 千里劍書何れの処にか尋ねん
身は転蓬に任せて遠近無く 思(おもい)は流水に随って幾浮沈
笑って樽酒に対して興先ず発し 泣いて離騒を読んで酔後に吟ず
唯太平の恩沢渥きに頼り 自ら章句を将(も)って青衿に托す

(大意)

男子は生まれながらに遠く四方に発展する志がある。自分も千里の道を遠しとせず、天下の学者剣客を尋ねて廻った。従って自分の身は裕も蓬（よもぎ）の葉のように処定めず飛んでゆき、また、自分の心も流水のように幾たびか浮き沈みがあった。貧しい生活の中にも時には樽酒に恵まれて同志と打ち興じたこともあり、酔後に離騷の賦を吟じて屈原（春秋戦国時代の楚の政治家）の忠誠とその不遇に泣かされることもある。然し、今は太平の世の中で屈原のように悲壯の死を以て世に訴える要もないので、文章を通じて志を青年に継がしめようと努めているのである。

文化十年（一八一三）、病を得て妻に看取られて江戸で波乱万丈の生涯を閉じた。享年四十五歳。

三奇人の中では彦九郎が幕府の嫌疑や圧迫を受け最後は久留米で自刃、子平はその著書「海国兵談」が発禁となり版木没収の上蟄居を命ぜられ悲憤の内に仙台で病死したのに比し君平の生涯は恵まれていたと言えるのではだろうか。

主たる参考文献

平重道『林子平 その人と思想』宝文館出版、

永田衡吉編『林子平』大日本雄辯會講談社

中居光男『先哲林子平先生の生涯』林子平先生二〇〇年顕彰実行委員会

『林子平展 その生涯と思想 企画展図録』仙台市博物館

三上卓『高山彦九郎』（平凡社、1940年8月）

木部克己、新田史研究会『高山彦九郎の実像 維新を呼んだ旅の思想家』

萩原進『高山彦九郎読本 王政復古の先駆者』（群馬出版センター）

吉村昭『彦九郎山河』

蒲生重章「蒲生君平傳」：『近世偉人傳・初編』（1877年）

安藤英男『明治維新の源流』紀伊国屋新書

市井三郎『明治維新の哲学』講談社現代新書